子どもと地域をつなぐ小学校を目指して

～将来を担う子どもたちのためにできること～

北海道美幌町　成田　健士朗

１．はじめに

美幌町は、北海道の東部、オホーツク海から 30 ㎞程度内陸に位置しており、面積 438．41 ㎢を有する人口約 20，000 人の農業を基幹産業とした町である。

美幌町の始まりは、明治 20 年７月、美幌外５カ村戸長役場の設置に始まり、大正 12 年に１級町制が施行され「美幌町」が誕生し、平成 29 年 10 月 12 日に開基 130 年を迎えた。

美幌町では毎年９月４日から６日に渡って神社の例大祭に合わせてふるさと祭りを開催しており、神社通りには 40 店ほどの町民手づくりによる出店をはじめ、巨大迷路やステージショーや子ども横丁が並ぶ。祭りのために帰省した若者グループや家族連れ、祖父母と孫、子ども同士など老若男女が３日間で町内外から延べ 10 万人が集まるこのイベントは、どの年代にとっても愛着があり 26 年目を数える。

美幌町位置図

さて、日本では第２次ベビーブーム期以降、出生児数の減少傾向が続いており、小学校の児童数にスポットを当ててみると平成元年の約 960 万人から平成 29 年は約 650 万人まで減少している。美幌町でも児童数の減少は例外ではなく、平成以降、少子化による影響で市街地郊外にあった８の小学校は、平成 26 年の福豊小学校を最後に農村地区における小学校は統廃合し、市街地の美幌・東陽・旭の３小学校となった。

平成 29 年３月に新学習指導要領が公示され、小学校では、平成 30 年度から道徳の教科化を皮切りに英語の教科化が移行期間を経て平成 32 年度から全面実施となる。大きな改訂内容としては「社会に開かれた教育課程」を柱とし、どのように学ぶか、何が身についたかの視点から「主体的・対話的で深い学び」が大きなテーマとなる。現在、美幌町の小学校は、普通教育の授業に使用する以外に、災害時における避難所や運動施設不足解消のために体育館を開放するなど、子どもたちだけでなく多くの住民にとって重要な役割を担っている拠点である。今後も児童数の減少が見込まれる中で、平成以降、統廃合によって地域との関係性が複雑化している小学校に焦点を当て、子どもたちと地域の関わりにおける現状と課題を分析し、美幌町を担う次世代の子どもたちがふるさと美幌に愛着を持ち、美幌で育ったことに誇りを持ってもらえるよう、学校と地域が連携して子どもたちを育てる持続可能な仕組みに必要な、地域に開かれた学校づくりについて考察する。

２．美幌町の児童数推移と小学校統廃合の経緯

（１）児童数の推移

学校基本調査における美幌町の小学生数推移をみてみると、図１のとおり、平成 29 年は 923 人で平成元年の 2,187 人から 1,264 人減少している。一方細かい視点で見ると、私が小学生時代を過ごした平成 10 年頃、学校内で学年の人数は３クラス編成で 100 人規模だったが、現在は２クラス編成で 60 人前後となっており 20 年間の児童数の減少がわかる。

（２）小学校統廃合の経緯

美幌町の農村地区における平成元年以降の小学校統廃合の経緯を少し紐解くと、多くは明治大正時代に尋常小学校所属の教授場として開講され、最盛期は全校児童数が 100 名を超える学校もあった。しかし、昭和後期にはいずれも 10 数名と減少したことから昭和 57 年９月に美幌町教育委員会が複式校解消の方針を決定し、その統合時期は、統合先となる市街地の学校の整備完了を目処とする見解を示した。

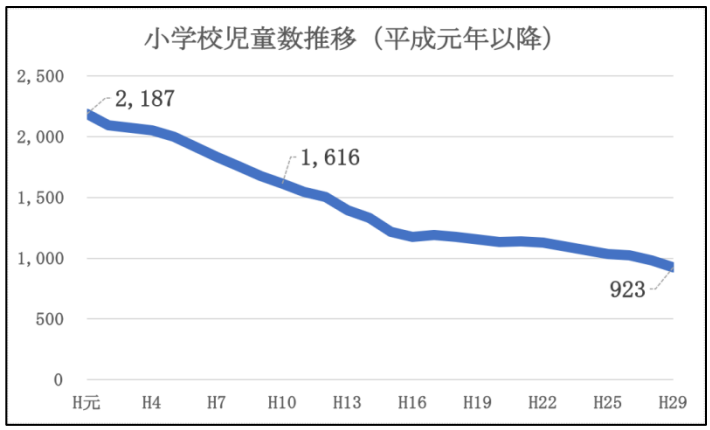


図 １　美幌町の児童数推移

これらの計画を基本とし、長い歴史をもつ農村地区の小学校が統合された。統合先の小学校の整備計画と統合された小学校は表１とおりである。

統合先小学校	統合された小学校	統合年
旭小学校（昭和 58 年整備完了）	都橋小学校	平成３年
	福豊小学校	平成 26 年
	古梅小学校	平成元年
東陽小学校（昭和 63 年整備完了）	日並小学校	平成４年
	田中小学校	平成 13 年
	報徳小学校	平成 13 年
	豊岡小学校	平成元年
美幌小学校（平成３年整備完了）	上美幌小学校	平成 19 年

表１　統合先の整備計画と統合された学校

３．アンケート結果に見る子どもと地域との関わり

本項では、全国学力・学習状況調査の児童質問紙における地域に関連する質問事項を取り上げ、美幌町における子どもからみた地域との関係性について、平成 27 年度から平成 29 年度の調査結果を、筆者がグラフにまとめてみた。

（１）調査概要

調査方法：全国学力・学習状況調査　児童質問紙調査から抜粋

調査対象：美幌、東陽、旭小学校第６学年の児童

対象人数：平成 27 年度　156 人

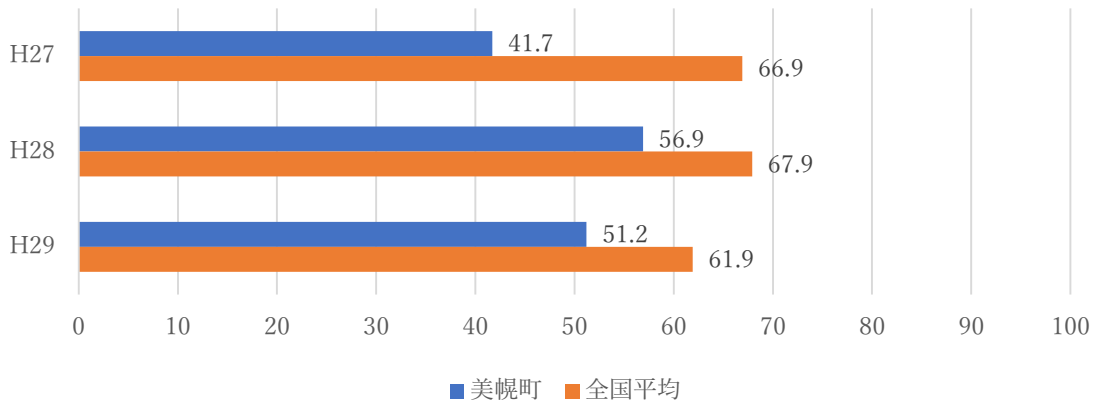
平成 28 年度　160 人

平成 29 年度　165 人

（２）質問内容と結果

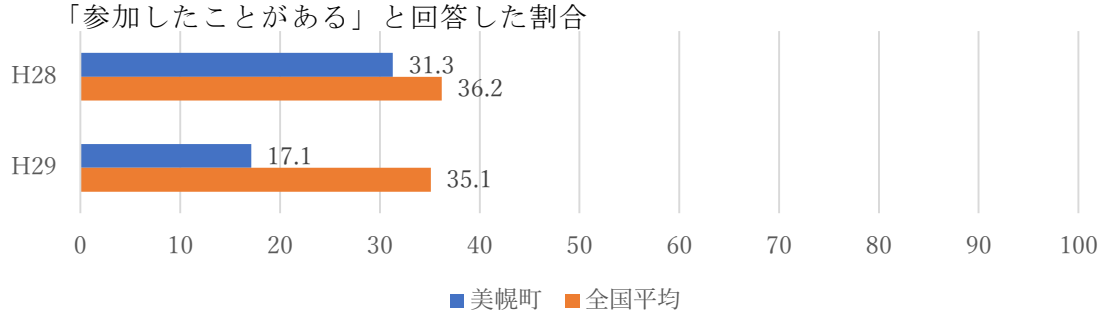
① 今住んでいる地域の行事に参加していますか

「当てはまる」または「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合



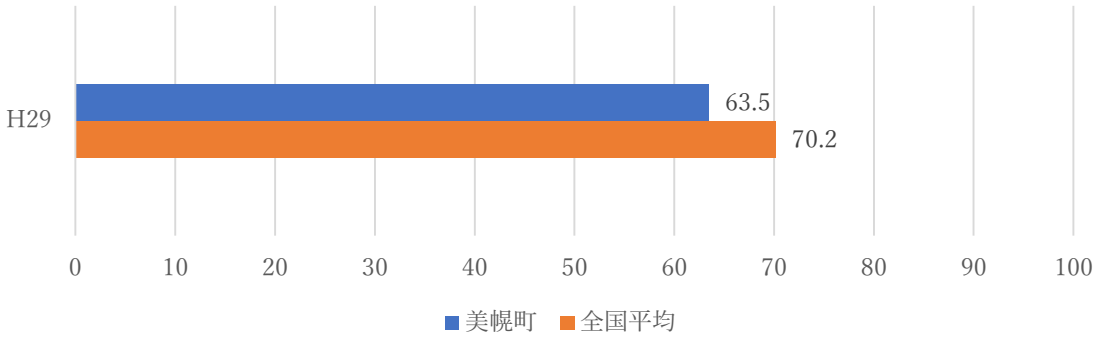
② 地域社会などでボランティア活動に参加したことがありますか（H28 から新規追加）

「参加したことがある」と回答した割合



③ 5 年生までに受けた授業や課外活動で地域のことを調べたり、地域の人と関わったりする機会があったと思いますか（H29 から新規追加）

「当てはまる」または「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合



アンケート結果では、子どもが回答した地域との関わりは全て全国平均を下回る結果となった。ベネッセ教育総合研究所の邵勤風（しょう・きんふう）による研究では、人や地域・社会に関する経験の多い子どもは、そうでない子どもに比べ、対人関係能力（人と関わる力、他者の意見を吸収する力など）といった非認知的能力が高いと論じている。それでは、美幌町での子どもたちと地域の人たちとの日常的な関わりはどうなっているのだろうか。

４.美幌町の教育における地域との関わり

第 6 期美幌町総合計画において、学校教育分野では教育内容の充実として地域資源を活用した授業の実施や地域住民の参画による「開かれた学校」の実現に努めており、地域住民の協力を得た社会教育事業の展開を通して、開かれた学校づくりを目指している。ここでは、子どもたちと地域の人との関わり方について、教育委員会と学校の取組に加え、ボランティアとして学校に携わっている方にヒアリングを行い現状と課題を分析する。

（１）教育委員会における取組と課題

平成 20 年度に PTA、自治会、社会教育関係者を中心に地域連携を目的として学校地域支援本部を設置し、支援方法のあり方を話し合いながら学校支援ボランティアを募集して、授業内・授業外の学習支援、校内の環境整備、通学路における安全指導など、教育資源リストを作成して学校のニーズに応えながら支援するという活動を行っていた。それまでは 1 校のみでの支援や学校以外での活動を行っていた団体もあったが、保護者同士の誘いや広報誌の案内を見た住民によるボランティア登録が増え、他校へも支援の幅を広げるなど様々な取組を行ってきた。しかし、国の事業終了に伴い美幌町では平成 23 年度に本部を解散している。

その後、これまでの事業を通じて得た地域ボランティア名簿や支援メニューを活用して学校から依頼を行い、現在でも活動を継続している団体は多くあり、一定の成果

を生み出した。しかし、当初から課題であった人員の固定化や高齢化の課題を解決することができず、主となって動いていた住民の転出によって引き継げる人がいないため活動を終了してしまった団体もある。

社会教育事業では、学校からの依頼により学芸員を外部講師として派遣し、総合的な学習の時間や社会科の時間を活用してアイヌ文化やサケの遡上について学習するほか、博物館見学の授業支援を行い、美幌の歴史や身の回りの生き物について教えている。授業以外では、社会教育主事が年に一度、小学４年生以上を対象に５泊６日の通学合宿を公民館で行っている。通学合宿は 20 名程度と少人数ではあるが、参加児童は学校、学年もばらばらであり、初めて顔を合わせる者同士がグループを作り夕食の買い出しや調理、掃除や洗濯など協力して集団生活を送る。親元から離れて生活することによって自主性や協調性を育み、日常生活において家族への感謝の気持ちを持ってもらう事がこの合宿の狙いである。また、地域ボランティアが指導やサポートで子どもたちと一緒に過ごすため、子ども同士だけでなく、大人も含めたふれあい活動となっている。この活動によって、家族だけでなく地域の大人に対しても感謝の気持ちが育まれている。

画像１　通学合宿中の様子

こうした取組は平成 28 年度からスタートした第７次美幌町社会教育中期計画の中で掲げられている、下記の推進目標の一つと、その３つの方針に基づき、協調性や社会性を育みながら将来の美幌町を一緒に支えたいという願いを込めて始まった。

推進目標

「子どもたちの個性や才能を認め合い、生きる力・生きる知恵、郷土愛を育みたい！」

方針

・ふるさと美幌を愛し、誇りを持つ子どもたちを育てます

・自ら考え、行動する力を持った子どもたちを育てます

・子どもたち個々の才能を認め合い、それらをさらに伸ばす取組を充実します

策定委員会による平成 23 年度から平成 26 年度までの４年間の活動評価では、子どもたちによる挨拶習慣の定着やボランティアに対する意識の向上は評価されている一方で、個別の取組を連携させる必要性や団体間での繋がりが希薄なため、団体間の交流が必要だという意見があげられた。

（２）学校現場における取組

美幌町では小学校３・４年生の社会科の時間において、町内の生活に関することを題材として副読本を作製しており、学校ではそれを活用し子どもたちに地域のことを教えている。その中から、学校、家庭で毎日触れており、子ども本人にとって身近なごみに関して取り上げる。授業ではごみ処理に関して概要を学び、最後はバスでごみ

処理場に行って現地の職員に施設の説明を受けたあと埋立地の見学を行う。

しかし、埋立地では、安全性や臭いなどの環境を考慮し子どもたちはバスから降りず見学するため、本来であれば資源として分別されるはずのごみが埋め立て処分となっている場面を見ることができず、ごみを粉砕する重機やごみに群がるカラスが目立ってしまい、その迫力に歓声が上がるという。

ごみ処理場の所長にヒアリングしたところ、本来であれば見学を通じてリサイクルに関心を持ち、家庭において普段の生活で見たことや見学した内容を親に伝え、間違った分別を続けると埋立地の寿命が短くなってしまうといったことを、子どもが家族に訴えることができるまでを願っているという。

（３）ボランティア団体の活動における取組

次に、子どもたちのために活動している団体について、現状を把握するためヒアリングを実施した

① 読み聞かせボランティア団体「美幌出前お話の会がらがらどん」

私自身、活動の概要は知っていたが実際に見たことがなかったため、活動に同行させていただいた。同行させていただき対話を行う中で、様々な気付きが生まれた。読み聞かせ活動は小学校の朝の会が始まる前に行う。教室に向かう途中の廊下では､すれ違う子どもたちから｢あっ、がらがらどんだ！｣｢今日はなんの本を読むの？｣といった声が聞かれ、子どもたちにとっても楽しみにしている時間であると感じた。また、何度も顔を合わせていることにより、読み聞かせに来ている大人たちに親しみがあるように感じた。子どもたちは教室内での読み聞かせ中は真剣に聞き、本の内容を楽しんでいる様子がうかがわれ､活動の目的である｢子どもたちが本に親しみを持ち､読書習慣の一助に｣という思いが伝わっていると感じた。活動については、本の選書や打ち合わせは月一回程度、町立図書館で行っているが、３校を巡回しているため各クラス単位で見ると２ヶ月に１回ほどの機会となっており、マンパワーの足りなさが課題だという。

画像 2　読み聞かせ活動の様子

② 地域安全パトロール隊「リトルウイング」

週一回以上の登下校時における声かけ運動を行い、不審者発生時にはパトロールを実施し、各隊員でそれぞれできる役割を考え活動している。

今回ヒアリングを行った隊員は社会教育委員を兼ねており、多くの計画策定に携わっている中で子どもたちのためになる関わり方を模索しており、今後の支援のあり方として「１年生の就学サポート」を考えているという。内容としては地域のおじいちゃんおばあちゃんが登下校の見守りに加えて給食の時間に学校に行き、おせっかいをしない程度にまだ給食に慣れていない１年生のサポートをする取組だという。学校に

とっても、子どもが自分でできるようになるよう教育をしているため過剰なサポートの必要はなくちょうどいい距離感が必要ではあるが、小学生になりたての子どもに対応する担任の教員１名だけでは圧倒的に足りず、実現ができれば教員にとっても助かり、地域住民が学校に入ることによって教員と顔が見える関係にもなるためおもしろい取組であると感じた。

この取組は実現までは至っていないが、現役を退いた年配の方にとって、子どもたちと交流し元気な姿を見るだけで子どもたちから元気をもらえるため、学校から要望があればネットワークを使って支援者を集うことは可能であると言っていただいた。

（４）アンケートと現状の取組から見える課題

先に記述した児童質問紙調査の結果と現状の取組から、子どもたちにとって地域との関わりが希薄になってしまっている課題と原因を３つあげ、解決に向けた今後の方向性を考える。

課題	原因
① 子どもが地域行事やボランティアに参加していると捉えていない。	・子どもにとって自治会の祭りなど、情報が入ってこないものや、ボランティアの意向があっても受け皿がないことが考えられる。
② ボランティアに携わっている団体が、自身の活動以外で子どもと交流する場がない。また、団体内でメインとなって動いてくれている人に頼ってしまい、その人がいなくなったときの人材確保ができなくなっている。	・活動するとき以外は、地域住民にとってどちらかと言えば入りづらい学校となっている。 ・授業日の平日昼間が主な活動時間帯であるため、高齢者や専業主婦に頼らざるを得ない。 ・団体間のつながりが希薄であるため、他団体へ知り合いの紹介などが閉ざされてしまっている。
③ 地域の人が外部講師となって授業を行うことも多くあるが、子どもによっては「地域との関わり」と捉えられていない。	・１回だけの施設見学などでは時間が限られてしまい、対話や交流が少ないため、授業の一部になってしまっている。 ・学校側は前例踏襲で教育課程を組んでおり問題視していないため、地域側が実施可能な支援メニューが見えてこない。

５.地域に開かれた学校から学ぶ今後の方向性

それでは、美幌町における子どもたちと地域との関わりにおける３つの課題に対して、どのようなアプローチができるだろうか。２つの事例から考えてみたい。

（１）秋田県大館市の釈迦内小学校から学ぶ取組

釈迦内小学校では、平成 22 年度に当時の４年生が取り組んだ、ひまわり油大作戦が東北経済産業局のコンテストで大賞を受賞したことがきっかけとなり、釈迦内地域のまちづくり協議会が主体となって「釈迦内サンフラワープロジェクト実行委員会」が誕生した。子どもたちが将来、この地で誇りと希望を持って暮らしていけるよう地域の大人が主体的に関わっていく取組であり、学校が核となって地域の活性化が図られている。

子どもたちと地域住民の交流について、釈迦内小学校では教育課程の中で１・２年生の生活の時間、３から６年生の総合的な学習の時間を使った授業で、プロジェクトを通じて地域住民との関わりを入学から卒業まで大きく取り入れている。実際に保護者への聞き取りを行ったところ、まちづくり協議会や婦人会の役員が学校行事に関心を持ち、積極的に関わっていく熱い思いと行動から、地域の方々も積極的に協力してくれているという。保護者にとっても、子どもと一緒に活動に参加することによって地域住民と顔の見える関係を築けるという。また、子どもにとっても、プロジェクトに限らず様々な活動において異世代の地域住民と交流する機会があることによって、地域の歴史や現代との違いを知ることができ、さらに人や地域への興味も増していく様子があり、子どもがボランティアを通じて主体的に地域へ関わっていると伺った。

ほかにも、学校では毎年秋に一年間の活動を報告する「ひまわり感謝祭」を実施している。そのイベントに多くの住民を招待しており、地域住民にとっても楽しみにしている行事であるという。子どもたちの発表の発表を聞いた後は、子どもたちが作った秋田県の郷土料理「だまっこ鍋」で交流する場を設けている。釈迦内小学校は住民が学校を支援するだけではなく、子どもが主体となって自分たちのことを知ってもらうための場になっている。

（２）統合前の小学校に学ぶ取組

統合前の小学校は、小規模校の特徴を活かし自治会や地区の青年団が受け皿となり積極的に学校の支援に関わってくれていたため、学校側も困ったことやニーズを伝えるだけで様々な協力を得ることができていた。地域の農家が講師となって行う農業体験をはじめ、運動会は地域が主催するなど密着した支援を行っており、保護者であるかは関係なく行事にも多くの住民が参加していた。

地域との関わりを子どもの視点から見ると、報徳小学校の閉校記念誌に書かれていた卒業生の思い出の文章には「小学校の時にＰＴＡや地域の方々の支援があったことは忘れません。運動会やお祭り、学芸会などは、地域の多くの方が参加してくれたことで楽しい思い出になりました」「学校美化のための花壇作りやスケートリンクなどを作っていただいたことは、小学生ながらに大変感謝しました」といった声があった。地域の人が自分たちを支援してくれていたことに対する感謝の気持ちが育まれており、子どもにとっても地域住民との関わりと捉えていることがわかる。

また、福豊小学校では、老人クラブの人を呼んで昔の話を聞いたことにより、当時の在籍児童は「昔の学校で人数が多かった時の話や、何回も改名された話を聞いて驚きました。昔の小学校のことがわかり、もっと詳しく話を教えてもらいたいと思って

います。」と書かれていた。
　このようなことは教科書の文字から読み取ることができないため、実際に生活していた大人の話を聞くことで芽生える感情であり、交流によってその地域への関心を高めることができるふるさと教育にもなっている。

（３）課題解決に向けたアプローチ
　課題①～③に挙げた子どもと地域の関わりについて、釈迦内小学校では教育課程に組み込んで地域住民との交流を行うことで、結果的に学校生活外でも子どもが主体的に地域への関心を示している。そして、美幌町の統合前の学校でも、地域住民が子どもたちのために関わっていくことができており、子どもにとっても地域への愛着を育んでいた。
　今でも美幌町には釈迦内小学校と同じくらい熱い思いで活動している方がいる。そういった方々との交流を通じて、子どもたちのためになる学校と地域の連携を次項で提言する。

５.これからの学校が地域と連携していくための提言
　現在の美幌町内の学校における地域との関わり方の現状を踏まえ、２つの事例から学んだことを参考にし、１点目にボランティア団体が子どもたちと日常的に交流できる取組を、２点目は教育課程内の授業において地域の人が講師となって複数回の関わりを持てる取組について提言する。

（１)学校図書館開放プロジェクト「ボランティア団体と子どもたちの出会いづくり」
　ここでは、学校図書館をボランティア団体に開放することで得られる効果について提案する。
　アクションプランとして、はじめに、町内の小学校で空き教室がある旭小学校で読み聞かせ団体とチームを組み、学校図書館を拠点としてボランティア活動を行うモデルケースを作る。具体的に、子どもたちとの交流をメインとして期待できる取組について下記に示す。

実践する行動例	子どもたちに対する効果
・学校の本を利用して読み聞かせを行う。 ・学校が子どもたちに対して読み聞かせで聞きたい本のリクエストを取る。	・子どもたちにとって身近にある本を利用するため、さらなる本への愛着を期待できる。
・休み時間、放課後を利用して、大型絵本の読み聞かせや子どもたちと一緒に図書の整理や本を選ぶ際のサポートを行う。 ・子ども自身が行う読み聞かせ教室を開催する。	・日常的に関わり交流することで、その人自身を知ることができる。 ・実際にボランティア活動に携わっている人と関わることで、子ども自身にもボランティアへの意識を高めることができる。

・小学生向けに地域行事を案内するため、学校図書館に掲示板を設けて情報を提供する。	・学校内で見ることができれば、自分が住んでいる自治会以外の行事も知ることができ、友人同士での参加も期待できる。

上記に加え、ヒアリングの中でアイディアとして出ていた「１年生の就学サポート」を実施することができれば、給食後の昼休みに行う読み聞かせ中のサポートもできることで交流が増え、「本」を通じた団体間のつながりにも広がっていく。さらに、子どもを通じてＰＴＡの支援にもつながればマンパワー不足の解消ができ、他の学校にも活動の拠点を広げられる可能性も大きい。

読み聞かせや就学サポートに携わる方に対しては、ボランティアであるため強制することはできないが、次世代を担う子どもたちのためになることを理解していただき協力を求めたい。

そして、長期的には他の特別教室や空き教室も開放し、地域住民のサークル活動や集う場として提供できれば、団体間同士の対話による情報共有や連携も生まれ、学校と地域の受け皿になることが期待できる。最終的な理想は、放課後に子どもがそこに一度寄ってから下校するような日常的な交流の場を目指したい。学校は教育の場であり、防犯面など配慮しなければならない点は山ほどあるが、学校への支援をきっかけに子どもや教員と地域住民が「顔の見える関係」を築くことができればクリアでき、子どもと地域の関わりは交流によって深まると考える。

今後、自身の活動として、はじめに読み聞かせ団体が活動拠点を学校図書館に移す土台作りに着手していきたい。

（２）町民講師プロジェクト「働く大人たちの姿を見せよう」

地域の人が講師となって複数回の関わりを持つための取組として、子どもにとって普段の生活で馴染みが深いごみの授業を具体例としてあげる。自分たちが排出したごみが、大人たちによってどのように収集、処理が行われ、正しい分別によってどのようにリサイクルが行われるかを、交流を通じて学ぶための場を提案する。

はじめに、ごみ処理場の職員に協力してもらい教員に対する講話をしてもらう。理由として、自治体によって分別の種類や処理方法は様々で複雑なため、大人でも難しく感じていることが多いからである。

次に、ごみの概要について学んだあとは、体験学習としてその場でできる分別ゲームを実施する。具体的には、家庭でも馴染みのあるお菓子や飲料、文房具などを用意し、簡易な模擬店を準備して関心を高め、買い物をした後に出るごみが正しい分別をすればどのような資源に生まれ変わるかを理解してもらう。

施設見学では、実際に動いている重機に乗る体験や、家庭から収集したごみの中で間違った分別をされているごみを見てもらうことで、より深く学ぶことができ、そこで働いている大人の大変さも知ってもらうことができる。

また、日常のごみ収集も、学校で出るごみを単に収集するだけではなく、月に一度子どもたちによる分別の日を設けて、収集する際は「きちんと分別できていました」などのコメントを残していくことができれば、継続した関わりを持つことができる。他にも、美幌町は農業が基幹産業であるため、野菜の選果所や農協で社会科見学を行

っている。同様に継続した交流プログラムを作り「野菜はどのように作られているか」に加え「どのような人達によって農業が支えられ、自分たちのところに運ばれてくるか」までを感じ取ってもらいたい。

リサイクルの学習では、プロジェクトを通じて新学習指導要領のテーマとなる主体的（分別する必要を考える）・対話的（現地で働く人の話を聞いてヒントを得る）・深い学び（自分の排出したごみのその先を考える）になることを期待したい。

私自身も全国地域リーダー養成塾の先駆的地域づくり現地調査に参加し、ホームページで調べるだけでは知ることができない地域のことを、直接対話することによって感じ取ることができた。そして、その地域を盛り上げようと頑張っている人たち自身の思いを、交流を通じて考えることができた。このような交流を行うプロジェクトを通じて、子どもたちにも講師として教えてくれる「人」への関心を高めてもらいたい。

教育委員会では、主に生涯学習のために保有している教育人材リスト活用して複数回の関わりが持てるメニューを小学校向けに整理することで、学校支援地域本部で取り組んでいたことにプラスαをした形でコーディネートし、学校と地域をつなげていきたい。

（３）まとめ

釈迦内小学校のように子どもたちと地域住民の「顔の見える関係」を築くことができれば、子どもたちは自ずと地域住民に感心を持ち、地域への愛着心を育むことができる。そうすることで、児童質問紙における地域に関連する質問に対する回答の数字に表れることが期待できる。

教職員にとっては、外部の人が学校に入ることで日程調整などの業務量が増えることによる反対意見があるかもしれない。そこで、校長にはリーダーシップを発揮していただき、支援者が集うことによって結果的に子どもたちのためになり、支援者によって自らも楽になる仕組みを作ることが可能であると認識してもらえるよう、子どもたちと地域住民の対話の必要性について発信することを期待したい。また、農村地区における統合前の小学校にあったような地域との深い関わりを作ることができれば、子どもながらに地域の人への感謝の気持ちを育むことができる。子どものうちに地域と関わる機会を持つことで地域に対する誇りや愛着が生まれ、将来は大学進学等で一度他地域に転出してもＵターンで戻ってこようというマインドを醸成することができるのではないだろうか。地域として「人との対話」を子どもたちの未来に紡いでいきたい。

６．おわりに

５月から研修が始まり、講義やゼミを通じて地域の人と話すことの大事さを学んだ。そして、レポート作成がきっかけではあるが、学校や支援団体の方と対話を重ねる中でその人自身の思いを知ることができ、小さな取組ではあるが学校とボランティア団体の思いをつなげることによって、これからの学校と地域のあり方について視えた部分がある。また、学校を通じて団体同士の活動内容をそれぞれ知ってもらい連携できれば、新たな形になるのではないかと感じた。毎年９月に行われているふるさと祭り

の中のイベントの一つに子ども神輿があったが、子どもを支援する大人の担い手不足により今年度は中止となってしまった。しかし、私の知人で「地域行事には子どもたちのパワーが必要だ」と、来年度は復活をかけて取り組むと宣言してくれた方もおり、地域には子どもたちのために頑張ってくれている人がたくさんいると感じている。私自身、これからも研修を通じて学んだことを活かし、子どもたちのために活動している方々の熱い思いを学校と結び付けられるよう励み、学校を地域がサポートすることによって、将来を担う子どもたちが地域の人に対する親しみや地域への愛着を感じてもらえるような仕組みづくりに貢献していきたい。

【参考文献】

・美幌町（H27-H29）全国学力・学習状況調査結果の概要について
・第６期美幌町総合計画　2016 年
・第７次美幌町社会教育中期計画　2016 年
・東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所との共同研究「子どもの生活と学びに関する調査 2015」
http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=4848